

冬の句子規にも想い？

文人の 武蔵野

夏目漱石の「武蔵野を横に
降る也冬の雨」という句は、

「海南新聞」(現愛媛新聞、1895年11月3日付)に掲載された「名月や故郷遠き影法師」と同様に、故郷としての東京／武蔵野を遠きにありて想う作とみることが出来ます。

そして、三十三間堂(京都)や瀬田の橋(滋賀)、錦帯(山口)など様々な場所の句を同時に詠んでいることから、過去の記憶を想起しているとも言えます。

また、かつて京の都の歌人たちが未見の武蔵野を想像し

夏目漱石 ③



松山で漱石が暮らした「黒陀仏庵」。ここに子規が身を寄せた(松山市立子規記念博物館提供)

て詠んだように、実体験とは関係なく時空を超えたノスタルジーの対象として「武蔵野」を幻想したと考えることもできます。実際、「武蔵野を横に降る也冬の雨」には、広漠た

る古の武蔵野に季節の雨が過ぐるイメージがあります。

さらに想像を膨らませるなら、正岡子規の武蔵野体験との関係を指摘することが出来ます。子規は、91年の11月、「僅」三日の糧を裹みて武蔵野を踏んで帰る」句作のため

の「漫遊」を経験し、写生に開眼したと繰り返し述べています。漱石にとっての子規は第一の読者です。作句と子規との関係は不即不離です。漱石が「武蔵野」を題材に句を作る時、直接聞いていたであろう子規の武蔵野体験に想いを馳せる瞬間があったとしても不思議ではないと思えます。

当時の子規が「武蔵野」と呼んだ旅先はいずれも今の埼玉で、忍(現・行田市)、熊谷、川越、吉見の百穴(現・吉見町)などでした。(武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍)

おすすめの1冊

「子規句集」

近代俳句の先駆者であり漱石の師友であった子規(1867～1902年)が35年の生涯に詠んだ句は、2万3000を超えます。本書では、子規の弟子でもある高浜虚子が選んだ秀句2306句が味わえます。松山の漱石宅に同居し句会を開いた1895年(明治28年)作の句が多く、また「武蔵野」の句も2句収録されています。



(岩波書店提供)